



志  
加  
々

特 別  
子 12  
3643  
13(15)



志賀

道あり邦代の花見月しく都れ

山より長閑き 杉身ハ當今よりは

たつて下也 儲も江洲志賀れ山標

今こそ藏成由承乃の程よか今志賀

の山路へと急ぐ 春乃色したるびく

を乃胡ほききく のどけさの音



梅若誠太郎氏  
昭和四年十月廿日  
梅若重太郎氏  
寄贈

羽山まきさ 越るをれば 是ぞこの名よあ  
 志賀の山こえや 湖遠き詠めおしく  
 早泊

暫此可よのそ花を詠めむらめてい  
 りく海や志がれ都の名をどめて首  
 あぐろ乃山様 妻よあわくや心  
 女ふいふもし情のゆるる 山路よ

日言ぬ想予牧笛の聲人向萬  
 様く乃世をわさるゆ乃乃方様お  
 ともまきさぎる眼の前きさうの影もや  
 戻つるしウ餘りよ山をまきくあてを  
 又跡を立つてくウ入つるおも白浪  
 荒うく谷の川を雨とのまきさえて  
 松の肉まきさるやあまなまきさ





物よ花の陰は似まらざるやしも華  
を物して貫えりや成るの玉乃をの  
うらまへ今も道はゆく  
のころや時代を尋ねるよ  
代は古く國を東に民をあてて萬機の  
まつり丸を治めよ  
時は至るごとくわが道はしるす  
時よ至るごとくわが道はしるす

今も秋をよと櫛ひに百六十年仙と始  
してを卯乃人てき野人の暮らひ  
ひろびろ。林まきのひの葉の露の  
色よさきゆき人の心き花よ成るも  
かまゆまの人きわぬことわが道は情も  
芳木も秋は津法香山の陰は  
井のあまきつら思ひあまの病ゆふ

志か  
おまゝの色あれや、淡れを研ぶるに  
三々の葉の心乃花の又音はも成  
や敷鳩の道有市代のをてりうひ  
終れ三十一文字の祓を守護し  
て無見頂相の如まも感應これ終  
君を安んずる萬民時を樂えて  
因縁の雲の志る白海ハ鳴の外遠も

上テ  
良の色萬歳の響ハ乃とをらまを  
今もつらぎの代ひうよ方れまら  
いぬ道直は復らひの東南は雲  
西北はの勢はくをのちさう  
や花を幸盤の山松乃まうま  
色はし見し私予の涙もるべや天  
地を動し鬼祓を感とあひともや

白土 志

ウツル也... 山縣ノツク... 家路づかみ  
末節し... 今も行  
さうつ... 大伴の...  
いれ... 此山の...  
ら... 此山の神...  
や... 大伴... 家名  
大伴... 我... 新...  
比

て... 山... 陰... 休...  
... 中... 雲... 山...  
... 山... 山...  
... 花... 月... 原...  
... 子... 草... 社...  
... た... 雪...



うび神をもちたまはるる花のまき  
志賀の山越くも同く花の里も  
まゆくをいけの海の志賀幸澤乃松  
内はも子繁のまけのけさよ海  
うまがらうてうむかき山年経  
めつちち若うらり それれ若うらり  
志賀若 志賀乃ちうらりまきく

志賀乃ちまき舞あつ  
山乃つて新れ乃ち白く  
和光乃あつて 志賀乃君  
代乃のまき色もま乃花若  
まづもあつてはまも心さ  
まづもあつてまの色もま  
志賀乃 志賀の夜れあつて

志

八尾

花多しきもほの白和幣  
 青和幣のわらわらと屋あけのさゆ  
 舞乃山邊をさくられば道はしりあり  
 ちる花の雲のハ油をみ  
 くれお井の清穢のそをかり拍み  
 をそろくして非かきまき面泊ま  
 があざうれく



